



チョンゲチョン ソウル清溪川 完成後視察

上山 寛

ソウルは楽しい街だった。街中に広がるハングル文字、韓国語を除けば東京とでも見間違えうほどに親近感を抱いたのは僕だけであろうか。



清溪川の模型を見学するツアー参加者

そのソウルの中心部には写真で見た他門川沿いに戦後の引揚者が建てたバラック状住宅地が密集した様子と同様な様子だった清溪川が高速道路を撤去し、近代的な川に再生されている。その総延長5.7km。現地で関係者の話しを聞きながら歩くにはあまりにも長かった。完歩は次回までのお預けである。

しかしながら二泊三日の全行程のなかで何度か清溪川を訪れる事が出来た。多くの市民がこの場所に親しんでいる様子に接してこのソウルと言う巨大都市の中心部に人間の近付けるヒューマンスケールの水辺空間があることの素晴らしさを実感し、うらやましく思った。

また下流部に位置する清溪川文化会館を二日目に訪れ、このプロジェクトに関する見ごたえのある展示を十分に堪能することが出来た。特に清溪川を中心とした巨大模型は興味深かった。この巨大プロジェクトが2年と言う短期間で完成されたことも驚きであり、ソウル市民のエネルギーと強い意志を感じた。

一方でその水源を漢江や地下水のポンプアップに依っていることを考えると、都市公園内の水辺空間の範疇にどうしても入れざるを得ない。この辺に清溪川の限界と他門川再生の可能性を感じた。新潟市の他門川は入口と出口で信濃川に接続されているという「自然河川」の再生が可能な唯一の川であり、堀割である。他の堀割との将来的な連携も考えるとその戦略的な位置



ソウル市街を蛇行しながら流れる清溪川（模型）

づけは大きい。

都市に自然河川を再生することにより世界一の環境創造都市「新潟」を目指すと言う大儀の基に他門川再生計画の意義を再確認した今回の訪問であった。

report チュンランチョン
★ソウル清溪川ツアー★《中浪川を訪れて》

ツアー2日目の午前中に訪れました。天気は若干雲があるものの、青空が広がって日差しが眩しく、暑いくらいでした。

中浪川(チュンランチョン:Jungrangcheon)は、漢江(ハンガン)の支流で、ソウル市の東部を南流して漢江と合流しています。



環境イベントで描かれた未来の中浪川

中浪川を見て、まず感じた事は、何処にでもある綺麗な川だなあです。街中ではあるが、兩岸は木々が茂って緑豊かで、水は澄みきって川底が見え、街の人達が河川敷で遊んでいました。

しかし、この川は2000年頃水質が非常に悪化していて、魚が大量に死んだ経緯があると、中浪川の再生について説明をお願いした地元のカンさんから聞きました

中浪川再生の取組みは、2001年頃から始まったようで、「Environment Love Jungrangcheon」と銘打って市民団体(主な活動は3人位)と区役所が一体となって進めているとのこと。最初の呼掛けで、沿線の市民約1,000が集まり、ゴミ拾いを行ったそうです。その後、植物や水生生物の観察・植樹・スケッチ大会や韓国の伝統的な遊び紹介等のイベントを行って市民の川への関心を集め、現在に至っているとの事です。ここでは簡単に説明していますが、カンさんたちが用意し

てくれた取組みを紹介した資料(ハングル語のため文字は読めません)の写真でも、その様子は十分理解できました。小学校では授業で、川への思い(環境?)についてのワークショップや自然観察等も行っているようです。

現在は、兩岸にサイクリングロードやゲートボールコート・簡単な遊具・緑地帯等が整備され、完全に市民の憩いの場になっていると思いました。

取組みは現在も続いており、車椅子の人が昇降りできる斜路等は、実際に車椅子を使って検証し、不便と判れば、即効で新しく斜路が作られ、福祉に対する整備が見直されているようです。ただ、中浪川の整備では、沿線の区役所毎に異なる木や草花を植栽するため、景観的に統制が図れていないことが問題のようです。



高水敷に整備されたサイクリングロード等

今回、中浪川を訪れて、中浪川の美しさや市民の憩いの場としての素晴らしさを知ることにより、通船川・栗ノ木川は最近やっと目に見える整備が少しずつ進んでいるもののその遅さを感じ、韓国の河川整備の速さを羨ましく思いました。

世話人: 安田 幸弘

report 03 清溪川の復元に伴う交通対策について（報告）1

1. はじめに

ソウルで清溪川を覆っていた高架道路と一般道路の一部が取り除かれて、以前の姿に復元され、地域が大変活性化している。

このニュースは知ってはいたが、あの大都市ソウル市街地の慢性的な交通渋滞を起こしているなかで、交通処理対策をどのように考え、実行されているのか興味があった。

以前ソウルでは、市街地の渋滞解消策として市街地への自動車の流入を防ぐ1つの案を実行した。それは、日の奇数日、偶数日にあわせて自動車ナンバープレート末尾の奇数、偶数の合う自動車のみ市街地に入れる規制をした。

結果は、ナンバープレートの奇数、偶数の自動車を2台持ったり、奇数、偶数のナンバープレートを付替えたりして、さらに渋滞が増すばかりで期待した効果が得られなかった。

このように、日本では反発が出て採用されない思い切った対策が、実行される韓国ソウルであるから、その交通対策は、当然、何か実行されていると予想していた。

これまで、多くの方々から清溪川復元の様子について報告がなされているが、交通問題についての報告が少なく、質問すると「代替え道路はなにもしてないようだ」「車は自然にフラッシュされて他の道路へ廻っているようだ」といった回答であった。

河川復元の報告をしているのに、交通問題について自分が場違いの質問をしているのだが……。道路を取り除くだけで、ソウル市民(交通利用者)が黙っているのかな?と大変疑問に思っていたところであった。

丁度そのころ、森本氏から「清溪川ツアーを企画するので参加しませんか」とお誘いを受け、現地へ行けば疑問が解決するかもしれないと思い、直ぐに参加を希望したのである。

清溪川の復元状況を自分の目で見てみることもあったが、やや不純な動機で参加したことから会員の皆様に申し訳ないので、知りえたことをここに報告します。

2. 清溪川復元に伴う交通対策

1) 出発前の準備

何か事前に情報が欲しいと思い探していたら、月刊誌「交通工学」に「ソウルにおける交通体系改編事業の内容について」と題した報告文があったので、

コピーして往路の飛行機の中で読むこととした。また、1997年韓国水原市にて、日韓技術士会議が開催された際、パネラーの1人として「環日本海回遊自動車道構想」を発表した時のコーディネーター兼通訳をした全相伯氏に、もしかして会えればと思い、そのときの名簿から電話番号を控えて出発した。



清溪川の左右岸 2車線が一方通行

2) 清溪川視察

清溪川の両側の道路は、2車線の一方通行により車の流れが比較的スムーズに流れていた。清溪川に架かる橋の形状は、全て異なっており見る人の目を楽しませてくれる。日本ならコスト削減の名のもとに同じ型の橋が架橋されてしまうことであろう。

歩きながら旅行者のガイドさんに全相伯氏と連絡をしてもらったが、通じないとのことで、会えないものと半ば諦めていた。

夕食時、清溪川の計画を担当し本日の案内役であるソウル市公園課の方に挨拶して、話している中で再度、全相伯氏に電話をお願いしたら、電話の局番が違っているとのことで、全相伯氏と連絡がとれ、明日、ホテルにて再会できることとなった。

全相伯氏は、han-guk((株)韓国総合建築士事務所)の代表理事・会長である。日本語が極めて堪能で日韓技術士会議では、いつも重要な世話役を果している。

3) 交通対策について

往路の飛行機の中で「ソウルにおける交通体系改編事業の内容について」を読んできたが、BRT(Bus Rapid Transit)に基づきバス交通の大改革が行われた報告文であった。

report 03 清溪川の復元に伴う交通対策について（報告）2

即ち、これまでのバス事業は、民間事業者がばらばらに営業展開をしていた。その経営の一元化を図り、運行路線の体系化を図るといふ、一度に大々的な改編を実行した内容である。

全相伯氏との再会は、ロイヤルホテルの1Fラウンジでコーヒーを飲みながら昔の日韓技術士会議の思い出話などをしたあと、私が疑問に思っていることを切り出した。

全相伯氏は、私が用意した白紙に略図や漢字を用いて説明していただいた。

Seoul 交通改善概要

韓国では、1988年オリンピック開催を迎えるためソウル市街地の交通対策の1つとして清溪川に高架橋を建設することとなった。その際、全相伯氏がその計画設計に関わった。

この度の清溪川の復元にあたり、交通対策は、4つの柱からなっている。

1 広域・市循環高架道路

ソウル市街地の外周を循環する広域循環高架橋道路と左岸右岸の市街地を循環する高架橋道路が、ソウル市の幹線道路として計画され、現在も建設が進められている。

2 地下鉄の整備

市内の地下鉄は、都市の発展とともに郊外へ延びつつある。改札は、全駅自動改札機で不正入場の時だけバーが閉じる型にした結果、利用者から好評を得ている。

3 バス運行管理の統一と中央バス専用車線

バス会社の運行管理をを一元化した他には、中央バス専用車線の導入が図られ、中央分離帯にバス停が設置されている。市街地の路肩側車線に駐停車が多く走行に支障をきたし、定時運行できないことから中央バス専用線方式が取り入れられた。

4 郊外交通に軽電鉄の整備

ソウルの都市は、周囲の山等がグリーンベルト的にバッファゾーンとなって、都市の発展が抑えられたため、更にその外側に都市および都市施設が発展した。新興都市には、軽電鉄の整備が進められている。

また3駅ごとに通過線路の増設により快速電車の運行が可能となるなど、利用者へのサービス向上に向けた建設が、盛んに行われている。



中央分離帯がバスの停留場

3. おわりに

清溪川復元に伴う交通対策についてのソウル市民の評価は、全体として市民に受け入れられているが、中には評価していない市民もいるようである。

交通問題は、どの国でも共通課題であり、その対策評価も自分の日常生活の行動範囲で、便利になれば評価は高いし、さほど感じなければ低くなるのは、各国共通である。

日本の高速道路道路の整備率(63%)が6割を越えたことから、もう道路はいらないという不要論が、都市部の人たちから出ている。本県の朝日～山北～山形県温海間は、未だ予定区間であって、いつ整備されるか全く不透明である。これは、地域の人たちにとっては、全く心外な発言であり、地域の痛みを理解していない都会人の発言である。その痛みを都会人から知ってもらう必要がある。

話題が少し外れたが、都市における交通対策は、このように道路だけでなく、多様な交通手段を用いるミックスモーダルによる総合交通対策が必要である。この考え方は、地方の地域にも十分活用できると思われる。

例えば、県内の国道252号、352号など冬期間、観光期間にミックスモーダルによる多様な交通を考えるときがきていると思う。

山岸 俊男

report

日本の川信濃川を本来の川らしい川に！

地球環境基金助成による調査活動始まる

当会は、1987年秋の「柳川堀割物語」上映＆シンポから20年目を迎えています。'89年の欧州近自然河川工法視察後から始まった長野県の水辺の会との「信濃川考流会」は毎年相互に訪問して続いています。'03年には長野県での「カンバックサーモンキャンペーンによる鮭の稚魚放流事業が2000年に終了した」ことを聞き何とか継続できないか議論しました。明治期の松本市にはサケが4万尾遡上し、昭和初期にも一万匹以上のサケが捕獲されたといわれています。昭和10年代の東京電力西大滝ダムや山手線の電車の電力用のJR宮中ダム完成後は、まれにしか遡上が確認できていないといえます。

'05年の考流会でもそれを取り上げ、昨秋の水辺シンポでは上流長野市の長田健氏、中流十日町市の山田努氏、魚沼市の坂本恭一氏、森民夫長岡市長、篠田昭新潟市長を交えて『鮭の回遊できる川』を議論し、そこでサケの発眼卵の放流実施を呼びかけましたが準備が整わず留保しました。

2、3年前、国交省の幹部の方から「生物にとって本来の信濃川の復元」をテーマに当会が取り組めないのかという問いかけがありました。21年間50万~30万尾を放流しても毎年数匹しか遡上しない長野県の千曲川。'04年の中越地震でダムの水が全量放流になって本来の川の姿を垣間見たという十日町市の信濃川。結局上流・中流・下流が連携し流域全体で取り組まないと『日本の川信濃川は本来の川』に戻らないことが判りました。いままでの上下交流から流域連携への第1歩を踏み出す時に来ていると考えました。

幸運にも、加藤世話人の助成申請企画案が平成18年度地球環境基金助成事業に採択されました。テーマは、「上流長野まで、サケの遡上できる信濃川流域の『川面の目線』による復活運動」(HPに掲載)です。

Revival motion of the natural river in the Shinano river from ecological viewpoint by the travel of the salmon upstream to Nagano prefecture

■助成申請企画内容

○流域連携での取組み

1. 流域の長野市、十日町市、魚沼市、長岡市、三条市、新潟市など流域の市民団体、ボーイスカ

ウト、各小中学校や大学研究室などの連携団体と協力し調査を行う。

2. 調査はダムの魚道調査を主体に専門家やNPO活動者の協力支援を得ながら行う。当時の食文化、行事など現状との比較調査も行う。

3. その調査結果を両県でセミナーを開き市民に公開し、市民からの聞きとりも実施する。

4. サケの自然な孵化による川の復元をめざして発眼卵の放流事業を、流域の市民、企業、団体、学校、自治体を巻き込んで行う。

○'06年の実施スケジュール

流域団体打合せ - 漁業関係者への協力要請 - 水系の水質調査及び河川状況観察 - 河川に測定機器を設置 - 流域団体会議開催 - 魚道などの水量や環境調査 - カヌーと水際近くでの川面の目線による調査 - アンケート調査 - 流域団体会議開催 - 調査結果のとりまとめ - 漁協の協力で発眼卵を入手 - 各地の団体・個人による放流 - 流域団体会議 - 新潟県・長野県両県の、調査結果第一次報告セミナー及びワークショップ - サケの稚魚放流 - 報告書提出。

○息の長い活動へ向けて

継続的な流域連携での本来の川の復活活動にしていくために会員の継続的な参加を期待します。また3カ年の助成要望を行いました。内容は以下の通りです。

本来の生き物のいる川、サケなどが遡上 - 産卵 - 降下のできない河川環境の原因がどこにあるのかを主体に調査を行う。昭和初期の川での記憶のある方が存命中に、川の食文化や地域の川行事などの比較調査も行う。3年間のプロジェクトで行い、1年目(基礎調査と流域連携)、2年目(基礎調査の検証と流域連携活動の強化)、3年目(流域団体のプロジェクトから、行政・企業を巻き込んでの連携活動へ)とする。

このプロジェクトの目標は、本来の信濃川の自然復元に発展させていくための流域連携・協働の可能性を拓くことであり、この事業はその展望への挑戦である。

世話人 加藤 功、相楽 治

■水辺レポート

report 05
佐潟クリーン活動支援

平成 18 年 5 月 9 日 (火) 毎年赤塚中学校の生徒が行っている佐潟クリーン活動に参加。周辺のゴミの収集作業である。佐潟は 1996 年ラムサール条約に登録されており湿地としての自然環境が高く評価されたものだ。

赤塚中学ではこの登録より以前に佐潟の環境保全やコハクチョウの観察に関わって久しい。

今回この活動支援の案内をもらったとき、いまさらまだゴミの収集とはと、なかば疑問を感じての参加であった。先生のお話ではこの活動を通じて佐潟の自然全体を考える機会にするのだとのことでもあった。出発してまもなく私の疑問への答えが待っていたのだ。それは空き缶とビニール、ポリ缶やはち切れそうなゴミ袋。ポイ捨てのゲリラが、条約登録の佐潟をあざ笑うように、しげれる雑草の陰に潜んでいる。遊歩道を一步はずれると雑草と藪が繁り、そこには不法投棄された農薬の空き缶をはじめとして産業廃棄物がどっさり捨てられている。

その昔湖沼や川辺はひとの近くにあって身近な生活ゾーンであつた。またその近くにはそれぞれのゴミ捨て場があり、そこに捨てられたゴミは分解して土にかえって自然循環の中に組み込まれていった。つい半世紀前まで、ものは大切に使うものとして捨てることには抵抗感があつた。素材としての高分子化合物は私たちの生活を豊かにしたが、自然の分解ができなくて、大量消費によるゴミとして環境を汚染するようになった。

クーラーの中で抱かれるように大切に冷やされたペットボトルも、最後の一滴を飲み干したその瞬間から邪魔者のゴミに変身する。大切なことはゴミをルールにしたがって捨てるという、なんのへんてつもないことだが、そのためにゴミを家に持ち帰る、ごく普通の勇気をもっとも必要なことだと改めて痛感したひとときであった。

香田 和夫

report 06
トゲソを救えるか？葉わさび定食。

五泉トゲソを守る会は希少淡水魚イバラトミヨを保護し、そのトゲソを取り巻く水辺環境の保全に取り組んでいる団体です。農村部の水辺(小川)を活動フィールドとして、新潟水辺の会とも連携しています。しかし、会をNPO化するにあたって、大きな課題に気づきました。つまり、環境活動の受益者は誰かということです。



葉わさび定食：葉わさびは根を食べるのでなく葉や茎を食べるわさび。醤油漬け、酒粕漬け、おひたしなどで食べる。酒のお供に最高。

そんな事は自明なことと言われそうですが、「みんなが受益者だが、特定されない」ということが難しい悩みなのです。絶滅しそうなトゲソを守っても、誰からも御礼はないということです。従って、その市民公共活動に対して、企業や公共機関が一定の「負担」を拠出する仕組みができない限り、汗はしたたり続ける結果となります。

疲弊こんぱいしたボランティアは、自己矛盾です。ここに、水辺の会や環境に取り組む団体の課題があり、大きな挑戦もあるのでないかと思っています。(もちろん、基本は志のある者が活動し支えるということですが。)

そんなわけで、ご多分にもれずトゲソの会も捨てられていたトゲソだけでなく、トゲソを取り巻く「湧水」「葉わさび」に注目しています。コミュニティービジネスとして「きれいな水」「おいしい葉わさび」でトゲソを救えないか？と考えています。

今年の4月には、葉わさび調理教室、トゲソの生息観察会で「葉わさび定食」(写真)を試食してみました。また、来年も実施します。どうぞ、ちょっぴり辛い「葉わさび」を食べ農村の水辺を考え、トゲソを救ってください。

会員 中村吉則
(五泉トゲソを守る会事務局)

report
堀割再生まちづくり情報

新潟水辺の会のみなさん、こんにちは。みなさんの会に続いて、昨年法人化した「NPO 法人堀割再生まちづくり新潟」の活動を、こちらの誌上に紹介する機会をいただき、まずは御礼申し上げます。

2000年3月に旗揚げした「堀割再生」の市民運動は、地道ながらも様々なアプローチによって少しずつ市民に浸透し、多くの理解と協力を得られるようになりました。

しかし同時に、活動目的の不明確さと、任意団体の脆弱さが問われるようになった為、社会からのより広い認知を得て、堀割再生に向けた具体的な活動を推進することを目指し、NPOを設立しました。

当会は、新潟の市街地に、新しい水と緑の空間を創出することと、その空間を暮らしに生かすことを活動の目的としていますが、その、かつてない魅力に溢れた水辺空間の素晴らしさを、市民へ訴えていくことが第一義です。

水辺の会のみなさんが提案し、研究している「他門川再生プラン」のように、当会でも「一番堀」「西堀」「早川堀」の3本の新しい堀プランを、分かりやすくまとめる作業を進めています。

この3本の堀は、当会の前身「堀割再生物語プロジェクト実行委員会」時代から拾い集めた市民の声をもとに選んだ場所であり、それぞれが、新潟の町にとって、象徴的な意味をもつ場所でもあります。

そのプラン作りの検証もかねて、昨年から、3本の堀跡を巡る「まちあるき」も順次開催しています。西堀では堀の遺構を調査する地中探査を、早川堀では町屋を探求するシンポを、一番堀ではプラン発表を、併催しました。

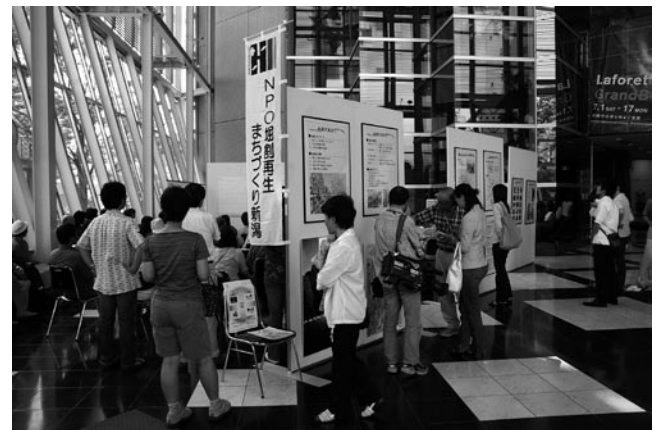
また参加の皆様には、わが町の歴史を学ぶために「堀割クイズ」に挑戦して解答をいただき、わが町に誇りを持っていただくために「堀割案内人認定証」を差し上げて、語り部になっていただく試みもしています。

市民の皆様と一緒に歩き、お話していると、たくさんの方のアドバイスを戴き、勇気づけられます。堀割再生の実現には、多少時間がかかったとしても、一人一人の市民と対話し、納得していただくことが不可欠だと実感しています。

その対話を広げるために、多くの市民団体とも交流しています。水辺の会の皆様とご一緒に、近江八幡市が音頭をとる「堀割協議会」や、「7県河川愛護交流会」へ参加して、堀割再生を全国発信しています。

市内では、早川堀つつじ祭りや下町ウォークへ参加して、少しずつ活動への理解を求めたり、まち遺産の会とシンポを共催して、まちづくりの提案を始めたり、古町どんどんでは活動紹介の屋台を出し、宣伝にも努めています。

その一方、今ある水辺を大切にすべく、西大畑公園の堀周辺を定期清掃するアドプト活動も始めました。地元の小学生と一緒に掃除をし、水際を飾る花を植えるなど楽しみながら、ゆくゆくは新能の舞台なども検討しています。



2006年7月8日に行われた堀プランのパネル展示

息をつく間もないほど、どっぷり堀の水に浸かっていますが、去る7月初めの週末には、NEXT21のアトリウムで、堀プランのパネル展示会を開催しました。

ご来場いただいた多くの市民の皆様からのご意見をもとに、3本の堀プランを練りなおして書面にまとめ、8月末に、篠田市長へ「提言書」としてお渡しする予定です。

亀のように遅々とした歩みですが、一歩ずつ確実に前へ進んで、望む水辺へたどり着きたいと願っています。水辺の会の皆様には、これまでと同様な応援を賜りますよう、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

NPO 法人堀割再生まちづくり新潟
会長 川上 伸一

■水辺レポート

report
通船川と貯木場なぜ丸太が浮かんでいるのか知りたい
こども環境会議にて 東山の下小学校5年 坂上 未来 さんの質問

通船川の特徴の一つに、二つの貯木場があります。

新潟西港の木材輸入の歴史は古く、特に北洋材ロシアや樺太(サハリン)は大正年間に始まり昭和初期では年間10万^{m³}を直輸入され新潟市を中心に製材業発展のもととなりました。

昭和27年4月の日華(日本と中国)平和条約発効によって外国貿易が再開されたのをキッカケに飛躍的に輸入が増え昭和29年12月、新潟西港は木材の輸入港に指定されました。

これによって通船川や栗ノ木川沿いの木材工場が木材を水に浮かべ仕事がしやすいように県営第一貯木場(学校の裏)が昭和38年に完成しました。

その後も、木材の輸入は増え続け第2貯木場の建設にとりかかる直前に新潟地震(昭和39年6月16日13時02分)が起きて昭和41年10月に完成しました。

現在、第一貯木場は近くの新潟合板振興(株)第2貯木場は大新合板(株)が主に利用しニュージーランドやフィリピン産の木材を中心にベニヤ板の製造をしています。

昭和44年、新潟東港が出来た頃、周辺に造成した工場団地に移転するという話題もありましたがバブル景気(あわのようなけいき)がなくなり話題もバブルになりました。

現在でも新潟地震後に通船川周辺に移転した多くの木材工場があり「材木町」「企業町」という町名があり発展しています。

施設の内容

第一貯木場

位置 新潟市下木戸地内 通船川左岸
面積 76,742m² (水上面積 69,000m²)
保管能力 19,000m³
事業費(当時) 3億9千2百万円

第2貯木場

位置新潟市松崎戸地内 通船川右岸

面積 127,970m²
保管能力 19,000m³
事業費 5億1千五百万円
川の利用総面積 53,489m²
水位 標高 - 1.65m (学校の裏の水位も同じ)
深さ 約 2m



新潟西港で船から降ろされた材木は筏に組まれ、貯木場に舟で運ばれてくる。

施設の管理と作業の内容

貯木場管理 新潟県農林水産部林政課
木材管理 新潟県港湾空港局 港湾課
川の管理 新潟県新潟地域振興局 地域整備部
それぞれが受け持って管理しています。

また、浮かんでいる木材の川は、くさると「ヘドロ」になるので川をはがし東港の焼却施設で燃やすことになっています。

答え 通船川・栗ノ木川ルネッサンス 星島 卓美

report NPO 法人新潟水辺の会 通常総会報告

去る7月9日「クロスパルにいがた」にて第6期通常総会が開催されました。会員数225名の内、出席38名(委任状125名)により、予定時間をオーバーするほど熱い議論がかわされました。(議案書は後日会員へ配布予定)討議された項目のみを報告します。



●(仮称)信濃川復活調査事業が、H18年事業として地球環境基金の助成を受けて始まりました。上流の長野県、十日町、魚沼、長岡と県境を越えた連携事業で、3ヶ年かけて「サケなど回遊魚の上り下り出来る川」としての調査を行います。

●他門川再生研究事業ではソウル清溪川ツアー研修を参考に、市民事業としての可能性の検討。リーフレットの制作・配布を行います。また、上山世話人が中心の栗ノ木川排水機場再生計画に協力します。

●通船川・栗ノ木川再生活動事業では桜祭りの成功や小学生の総合学習がキッカケでフェンスを外し船着き護岸が整備されたことにより、川とのつながりも深くなりつつあります。

●身近な水辺の水質調査は6月4日に行われ、県内440カ所、40団体850人が参加し、会主催の事業として定着してきています。

●来年の設立20周年記念事業として記念誌を今年発行します。小船井世話人、金田世話人中心の強力スタッフで、出来上がりが楽しみです。

●最後に会員からの問題提起されている万代橋のたもとに高さ70～80mの3棟のマンション建設計画。これが景観上だけでなく、秒速30m位のビル風が起る可能性があることなどの指摘がありました。

また、環境活動団体は、その性格として、お金が動く仕組みが無いので、資金づくりの仕組みを作る必要あるとの提起があり、千葉県市川市の「市民活動団体支援制度」(1%支援制度)を例に、議論しました。

懇親会も同じ会場で行い、6.17-19に20名の会員が参加した清溪川ツアーのビデオを見ながら歓談しましたが、1時間程度と時間が短く、交流は不完全燃焼で、事務局として反省点だったかもしれません。次回の交流会に期待してください。

世話人 森本 利

イベント情報

8.12 通船川灯籠流し
8.19 北前船サミット
8.19 または 8.28 サケの川会議
8.26 萬代橋誕生祭&景観フォーラム
その夕方から栗ノ木川の夕べ
9.3 通船川クリーンアップ
9.10 他門川再生研究会
9.16-17 阿賀野川連携フォーラム
9.17-18 水郷水都大阪大会
9.23 つづくり市民会議&食舟イベント
9.30-10.1 信濃川考流会&サケの川会議
場所： 十日町地域（会場は未定）
テーマ：「サケなど回遊魚の上り下り出来る川」復活を目指して
内容 30日午後から学習会、夕方から懇親会
1日現地視察
参加費：15,000円程度（宿泊費、懇親会費）
問い合わせ：森本 090-1613-1879

編集後記

この67号から編集人になりました森本です。会発足から数えると5代目です。（八木栄子→阿部米美（旧姓川口）→高橋正良→杉山泰彦）

会報が目的の会員も多く、年4回の季刊を目標に発行しています。

広報担当としてホームページの充実などの課題もあります。ほかに来年10月の20周年記念事業として記念誌を発行します。

これは小船井世話人、金田世話人の強力スタッフが担当します。ご期待ください。

会員からの記事も募集中です。今後とも、よろしくお願ひします。

5代目編集人 森本 利

入会案内

この会は、遊び半分・真面目半分で活動しています。ウォッチングには、家族ぐるみで子供達も一緒に参加したりしています。自分の足で水辺を歩くなりして、自分でも感じたことから、自分の水辺を発見していく、あるいは考えていくことを大切にしています。今までとは違った視点から、あらためて自分の身の回りに目を向けて見ると、同じものを見ているのに今までとは違うものに見えてきます。新しい発見があります。自分の世界もまた少し広がってきます。この会も色々な分野の人達が集まって、それぞれの世界がもっと広がっていくような出会いの場を提供できる会にしたいと考えています。あなたの参加お待ちしております。

■設立年：1987年10月15日 ■目的：水辺に関わる自然、歴史、文化、生活、風俗、スポーツ、レクリエーション並びに科学技術を探り、これからの水辺の望ましい姿を考え、地域の生活向上に寄与することを目的とする。 ■代表者：代表 大熊 孝（新潟大学工学部教授） ■会員数：個人214名・法人11団体（2006年8月現在） ■活動：水辺シンポジウムの開催 / 水辺ウォッチング / 会報「新潟の水辺だより」の発行 / 水辺環境整備に関する学習会 / 長野県富山県の水辺グループとの交流会 / 通船川、佐潟の調査・研究 etc. ■年会費：個人会員一口1,000円を2口以上、賛助会員（法人など）一口5,000円を2口以上

入会申込書

年 月

フリガナ氏名		男・女
		歳
特技や水辺への想い		メールアドレス
住所	〒 () -	
職業		
勤務先	〒 () -	

注)紙面の都合上、縮小しています。
250%程度拡大コピーをしてご使用下さい。

●事務局からのお願い

インターネットメールで随時会員の皆さんに情報をお届けしています。メールアドレスを新しく持った方、アドレスを変更された方は事務局まで御一報ください。

●発行：特定非営利活動法人 新潟水辺の会

●事務局：〒950-2264新潟市みずき野4-7-15

大熊 孝 方

Phone 025-264-3191

F a x 025-264-3260

ホームページ

ttp://www17.plala.or.jp/mizubenokai/

メール mizubenokai@plum.plala.or.jp